保健体育科

川口　寿恵
廣瀬　尋理
共同研究者　横山　剛士（金沢大学）

１．はじめに

現代社会は，内閣府が提唱する「Society 5.0」へと移行しつつある[1)]。この新たな社会では，AI や IoT などの技術活用が進む一方で，雇用の二極化といった課題も指摘されている[2)]。これらの課題を解決するには，潜在的な問題を発見し，新たな価値を創造する能力，すなわち創造的問題解決能力の育成が不可欠である。

本校は文部科学省の研究開発制度を受け，新設教科「創造デザイン科」を通して創造的問題解決能力の育成に取り組んできた[3)]。しかし，この能力をより一層強化するためには，特定の教科の枠にとどまらず，学校教育全体で一貫したアプローチが必要であると考えられた。そこで昨年度より創造的問題解決の基盤となる「イノベーターが有する態度」に着目し，「創造的に問題解決を試みる生徒の育成－教科等の指導を基盤として―」を研究テーマに設定し，各教科等で創造的に問題解決を試みる生徒の育成を行うことになった。

保健体育科におけるイノベーターが有する態度の育成について検討すると，保健体育科の目標には「体育や保健の見方・考え方を働かせ，課題を発見し，合理的な解決に向けた学習過程を通して，心と体を一体として捉え，生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す」[4)]と示されている。この「課題を発見し，合理的な解決を図る」学習プロセスは，イノベーターが新たな価値を創造する際に不可欠な問題発見力，思考力，および判断力の育成に直結するものと考えられる。

また，柴山[5)]は高等学校学習指導要領（保健体育編）の教科目標にある「運動や健康についての自他や社会の課題を発見し，合理的，計画的な解決に向けて思考し判断するとともに，他者に伝える力を養う」という記述について，現代における創造性教育を表していると指摘している。同様の趣旨は小学校と中学校の学習指導要領でも表現がなされていることから，学校教育における体育科および保健体育科における授業実践は，イノベーターに求められる創造性の育成に寄与し得るもといえる。

しかしながら，イノベーターが有する態度の育成を意図した保健体育の授業実践はあまり見られない。そこで本研究はイノベーターが有する態度の育成を意図した授業実践を行い，創造的に問題解決を試みる生徒を育むことをねらうこととした。

２．育成を目指す態度

本校は育成を目指す態度を以下の７つ設定した。

A. 主体的に取り組む態度
B. 自ら問題を見つけようとする態度
C. 新しいものを取り入れようとする態度
D. 批判的に物事を見ようとする態度
E. 他者と協働する態度
F. 失敗を恐れない態度

G. 計画を立てて実行する態度

上記の７つに設定した経緯を以下に記す。

これまでの学校教育は，生徒を自立した学習者として育成しきれていないという課題が指摘されている[6)]。この問題は，新型コロナウイルス感染症の世界的流行に伴う臨時休校時に顕在化した。具体的には，学校や教員からの指示・発信が停止すると，生徒は「何をすべきか分からない」状態に陥り，学習を停止してしまうという実態が確認されたためである[7)]。これからの社会で求められる学習者の姿は，自ら課題を設定し，その解決に向けて主体的に取り組む姿勢に他ならない。この自立した学習者に求められる態度は，イノベーターが有する能力と多くの点で共通している。

例えば，ワグナーはイノベーターが有する態度として，好奇心や問題に敏感であることを挙げている[8)]。また，ヤング吉原らが提唱するイノベーターのマインドセットには，「ひとまずやってみる」ことや「失敗を通じて前進する」といった要素が含まれる[9)]。これらのことから，本校ではイノベーターと自立した学習者の間に共通する態度があるのではと考え，教職員でその共通の態度について以下の手順で検討した。①校内研究会にて，本校職員一人一人がイノベーターが有する態度と自立した学習者が有する態度を個人で考え，付箋で記録した。②その付箋を各学年で集めKJ法にてグループ化（図１），ラベル化，図解化（図２）を行った。③これらを学年で発表し（図３），共通の態度の要素を共有した。④共通の態度の要素をさらにグループ化し,そこから研究部で共通の態度を作成した（図４）。



図１　個人で考えた付箋をグループ化する様子

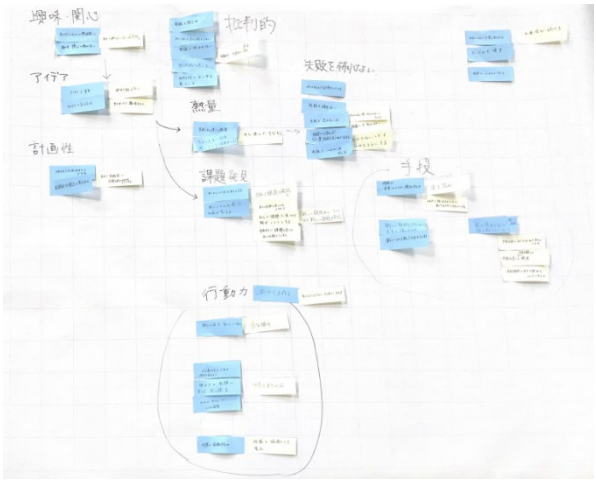


図２　ラベル化，図解化の様子



図３　各学年の発表の様子

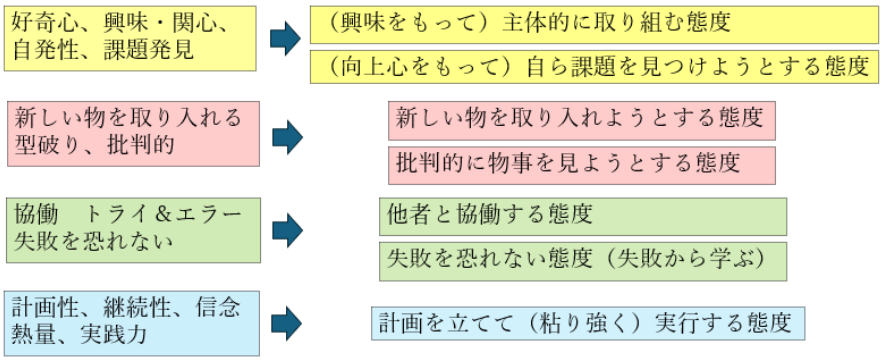


図４　態度の要素と共通の態度

上記の過程で決定した七つの態度のうち，昨年度より保健体育科では「E. 他者と協働する態度」「F. 失敗を恐れない態度」について育成を試みた。

まず「E. 他者と協働する態度」についてはこの態度を育成することにより，「運動技能を習得する」だけでなく，仲間と協力して共通の目標を達成する姿勢を育むことができると考えた。また，互いの意見を尊重し,課題を解決する力を養うことができると考えられる。他者と協働することで，円滑な人間関係を築く力や，多様な状況に対応する課題解決力を育むだけでなく，保健体育科の目標でもある豊かなスポーツライフを実現するための基盤を築くことが可能であると考える。昨年度の実践では，美術科と保健体育科を横断し，日本画から得た視覚的イメージを身体表現へと翻訳する創作ダンスを行い，多くの生徒に協働的な態度の伸長が見られた一方で，①合意形成技術の不足②役割の不明確さによる傍観者化③多様性を日常化する仕組みの欠如という３つの課題が明らかとなった。

本研究では，これらの課題を克服するため，今年度は日本画に加えて音楽という新たな感性軸を創作プロセスに組み込む。生徒はグループで「日本画×音楽」の組み合わせを選択し，絵画と音楽の両方から得た印象を言語化した上で，身体表現へとつなげていく単元を計画した。第１学年ではこの基本的な枠組みに取り組み，第２学年では１年次の経験を踏まえて，テーマ選定への主体的参画，個々の役割の明確化，他グループとの相互ファシリテーションという３つの発展的要素を加えた単元を計画し，実践する。これらの実践を通じて，生徒が根拠を持って自らの考えを伝え，他者の意見を尊重しながら合意形成を図る力，そして特定の生徒に依存しない全員参加型の協働のあり方を身につけることをねらいとする。アンケート調査及び学習記録の分析を通じて，その効果を検証することを本研究の目的とする。

次に「F. 失敗を恐れない態度」については，失敗から学ぶ態度を身に付けることで，「F. 失敗を恐れない態度」につなげたい。失敗から学ぶ態度を育成することで体育の授業で単に「運動技能を習得する」だけでなく，「どうすればできるようになるか」を自ら考えることにつながると考えられる。「どうすればできるようになるか」を考えることは保健体育の思考力・判断力・表現力を育成する目標でもある「自他の課題を発見し，合理的な解決に向けて思考し判断する」ことや，生涯にわたる運動習慣の形成にもつながり，保健体育科の目標でもある豊かなスポーツライフの実現にも寄与すると考えた。

３．指導の手だてや評価方法の検討

「E. 他者と協働する態度」の育成にあたっては，昨年度の美術科・保健体育科の連携に加え，今年度は音楽科を含めた３教科の連携として取り組む。それぞれの教科が異なる感性へのアプローチを担うことで,生徒が多角的な視点から一つの表現を創り上げる経験を積み重ねられるようにする。

「F. 失敗を恐れない態度」の育成にあたっては，昨年度同様に跳び箱でペア学習を通じて育成を試みたい。

（１）教科として取り組む指導の手だて

「他者と協働する態度」の育成にあたっては，美術科・音楽科での言語化を土台に，グループで２組の「日本画×音楽」のどちらかを選択し，言語化したイメージを身体活動（創作ダンス）へと翻訳していく。振り付けを教え合ったり，互いの動きを見合ったり，タブレット等で動きを動画に撮影して確認し合ったりしながら，グループで一つの作品を仕上げていく。

創作の過程では，教師は創作に関する指導をしながらも，生徒の学習を支援する立場を重視し，

あくまで生徒たちの話し合いを見守りながら，必要な場面でのみ，合意形成の手順を思い出させるような声かけを行う。これにより，教師に頼らずグループ自身で対立を乗り越える経験を積ませることをねらいとする。

「失敗を恐れない態度」の育成にあたっては，失敗から学ぶ場面を多く設定し，「 失敗を恐れない態度」の育成につなげたい。それは例え失敗をしても，その失敗をポジティブに受け止め，それが次へのステップにつながることが実感出来れば失敗を恐れなくなると考えたからである。

昨年度は「失敗は成長のために必要なものである」という意識が向上した。一方で「体育の授業での失敗とは，仲間の期待に応えられないことである」という項目が前後で増加した。これにはペア学習の導入が大きく影響していると推察される。跳び箱という個人の技能習得を目的とする場が，ペアでの活動を通じて，相手のアドバイスや応援に成果で応えたいという責任感や他者意識を育む場へと変容した結果だと考えられる。このことからパートナーが送ったアドバイスや，それを受けて試行錯誤した過程を，教師が汲み取り賞賛するなど工夫したい。

（２）評価について

ダンスの評価は観察と学習記録（自己評価・グループ内相互評価）を基本とし，あわせてアンケート調査を実施することで，態度の育成状況を量的にも検証する。学習記録には，各自が担った役割ごとの活動内容やそこでの気づきを記述する欄を設け，個々の生徒の参画の様子を可視化できるようにする。今年度は，昨年度の量的検証の枠組みを維持しつつ，新たに加わった要素（組み合わせの選択，言語化，個々の役割の明確化，クロスグループ・カンファレンス）に対応した評価項目を追加する。

授業前後のアンケートに回答させる項目に，「組み合わせを選ぶ際，意見の違いを調整できましたか」「言語化したイメージを仲間とすり合わせることができましたか」「自分の役割を果たすことができましたか」「他グループのファシリテーターを経験して新たな気づきがありましたか」「異なる組み合わせを選んだグループの作品から新たな発見がありましたか」などの項目を新設し，合意形成・役割意識・多様性の実感という３つの観点から量的検証を強化する。

学習記録には，単元を通じて自分が担った役割について，どのような貢献をしたか，またその役割を通じてどのような気づきがあったかを記述する欄を設ける。これにより，1 年次には見えにくかった個々の生徒の参画の様子を，役割を明確にしたことでどれだけ可視化できたかを検証する。

そこで，Padlet での相互評価に「言語化したイメージと動きの結びつきの工夫」という観点を新たに加え，単なる技能面の評価にとどまらず，発想から表現に至るプロセスそのものを互いに認め合う機会を増やす。また，教師による観察評価としてクロスグループ・カンファレンスの場面では，教師は生徒がどのようにファシリテーター役を担っているかを観察し，合意形成の手順がどの程度自分たちのものとして身についているかを見取る。

跳び箱の評価は観察と学習記録で行い，学習記録については学習状況の振り返りである自己評価も参考にする。また，昨年同様のアンケート調査も実施し，昨年からの改善を見とれるようにする。

（２）学年の試み

①第２学年女子

ア．２学年でこの単元に取り組む意義

１年次に「日本画×音楽」の創作ダンスを経験した生徒が，２年次に同じ枠組みでもう一

段階発展した実践に取り組むことには，大きな意義がある。1 年次の実践を通じて，生徒はすでに絵画と音楽からイメージを言語化し，身体表現へと翻訳するという創作の基本的なプロセスを経験している。２年次では，この土台をそのまま活かしつつ，1 年次には十分に踏み込めなかった部分として，①選択の理由をより深く言語化すること②個々の役割を明確にして責任を持たせること③自分たちのグループを離れて他者の話し合いに関わることに挑戦させることで，協働する態度をより自律的なものへと育てていきたい。

イ．２学年で新たに組み込む３つの発展的要素

昨年度の経験を踏まえ，２学年ではさらに主体性を高める次の３つの発展的な要素を単元に組み込む。第一に，生徒に主体的に学習に参画する場面を設定することである。テーマ選定からの主体的参画として１年次は教師側がグループを決め，日本画の選択もグループごとに教師が指名していたため，生徒自身が「選ぶ」という経験をしていなかった。２年次では，グループ編成をくじ引きに変えるとともに，２組の「日本画×音楽」からどちらで創作するかをグループで話し合って選択できるようにする。さらに，選択の過程そのものをより深く言語化・議論させ，選んだ理由をグループとして説明できるようにする。単に「なんとなく好きだから」ではなく，絵画や音楽のどの要素に着目してその組み合わせを選んだのかを，根拠を持って言語化する経験を積ませたい。

第二に，生徒一人一人に役割を与え，責任をもった学習活動が進むようにすることである。１年次は特に役割を定めずに活動していたため，責任の所在があいまいになり，一部の生徒が傍観者的な立場にとどまる傾向が見られた。個々の役割の明確化を図るために，２年次では，グループ内で個々の役割を明確に定め，１人ひとりが自分の役割に責任を持って取り組めるようにする。役割を固定することで，単元を通じて自分の担当分野を深めていくという，専門性を軸にした関わり方を経験させたい。

第三に，他グループとの相互ファシリテーションを取り入れることで，多様な他者と合意形成する経験をさせることである。単元の中盤で，生徒が一時的に自分のグループを離れ，別の組み合わせを選んだグループの話し合いに加わり，合意形成のファシリテーター役を担う場面を設ける。自分のグループの当事者としてではなく，第３者として他者の対等に関わることで，合意形成の手順を，誰かに言われなくても自分から意識して使える力を育てたい。

②第２学年男子

「失敗を恐れない態度」の育成にあたって具体的には①計画したものを実行する中で，やってみて成功や失敗から学ぶ場面の設定。②振り返る（自己評価・他者評価）ことにより効果的な解決策を考える場面の設定。③悪かったことだけでなく，よかったことや次がんばることの振り返りを通じて考える場面の設定。④「なぜうまくいかなかったのか」「どうすれば次につながるか」をみんなで考える場面の設定。⑤失敗を共有する場面の設定。⑥失敗から学んで改善しようとしたことや新たにチャレンジしたことを他者から評価を得る場面の設定などを考えた。上記の内容を単元の中に入れて失敗を恐れない態度につなげたい。

６．参考文献

1） 内閣府 Society5.0　https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.htm

2） 文部科学省：Society5.0 に向けた人材育成～社会が変わる，学びが変わる～，

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/detail/__icsFiles/afieldfile/2018/06/06/1405844_002.pdf
3) 金沢大学附属中学校研究紀要：新たな社会を見据えた探究的な活動に関する考察（２年次）-新設教科「創造デザイン科」の提言及び各教科等との効果的な関わりを目指して-
4) 文部科学省：中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説保健体育科編，東山書房
5) 柴山　慧：創造性教育としての体育授業を構想する　体育科教育，p51（2021）
6) 文部科学省：「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）
7) 北 俊夫：「自立した学習者」を育てる学校・授業の在り方，教育セミナー研究紀要，26 巻 1 号 4-7（2023）
8) トニー・ワグナー，藤原朝子訳：未来のイノベーターはどう育つのか，英治出版（2014）
9) ヤング吉原麻里子，木島里江：世界を変える STEAM 人材，朝日新書（2019）
10) 村上雅之他：小学校体育授業における児童の失敗に対する価値観の構造，北海道体育学研究 57 p19-29.　（2022）

２年女子単元計画

単元目標	知識及び技能	感じを込めて踊ったりみんなで踊ったりする楽しさや喜びを味わい、ダンスの特性や由来、表現の仕方、その運動に関連して高まる体力などを理解するとともに、イメージを捉えた表現や踊りを通した交流をすることができるようにする。 創作ダンスでは、多様なテーマから表したいイメージを捉え、動きに変化を付けて即興的に表現したり、変化のあるひとまとまりの表現にしたりして踊ることができるようにする。
	思考力、判断力、表現力等	表現などの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。
	学びに向かう力、人間性等	ダンスに積極的に取り組むとともに、仲間の学習を援助しようとすること、交流などの話合いに参加しようとすること、一人一人の違いに応じた表現や役割を認めようとすることなどや、健康・安全に気を配ることができるようにする。

学習の流れ（学習過程）	時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	授業づくりのポイント
	0	健康観察・準備運動・本時の目標，内容等の確認										・グループで自由に意見を出し合い，共通のイメージを創り上げるよう指導する。 ・振り付けを教え合ったり，互いの動きを見合ったり，動画で撮影してりして，アドバイスし合うように指導する。 ・合意形成の手順を確認させ，対立が起きやすい場面であえて実践させる。 ・クロスグループ・カンファレンスで当事者から第三者の立場に置き，スキルを客観視させる。
	10	オリエンテーション(グループ編成・役割分担)	・言語化したイメージをもとに，動きのアイディアを出し合う。 ・各自が自分の役割を意識しながら，責任を持って意見を出す。 ・個人で考えた動きを・グループ内で見せ合い，良いところを取り入れながら組み合わせる。		・動きと音楽を組み合わせる試作をう。 ・合意形成の仕方のワークショップ		「はじめ-なか-おわり」でひとつの作品にまとめる	・中間発表会 ・padletで相互評価をする。	・構成の見直しと躍り込みをして作品をまとめる。 ・発表会の準備をする。		ダンス発表会	
	20											
	30											
	40						グループでの話し合い見せ合い		クロスグループ・カンファレンス		単元の振り返りとアンケートの実施	
	50											

指導と評価の機会		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	評価方法
	知	①	②							③		観察・ワークシート
	技		① ②					④	③		④	観察
	思				①	③	②					観察・ワークシート
	態	①			③	③			②		④	観察・ワークシート

単元の評価規準（学習活動に即した評価規準）		
	知識	①ダンスは、仲間とともに感じを込めて踊ったり、イメージを捉えて自己を表現したりすることに楽しさや喜びを味わうことができることについて、言ったり書き出したりしている。
		②それぞれのダンスには、表現の仕方に違いがあることについて、学習した具体例を挙げている。
		③ダンスは、仲間とともに感じを込めて踊ったり、イメージを捉えて自己を表現したりすることに楽しさや喜びを味わうことができることについて、言ったり書き出したりしている。
	技能	①「走る―跳ぶ―転がる」「伸びるー縮む」をひと流れでダイナミックに動いてみてイメージを広げ、変化や連続の動きを組み合わせて表現することができる。
		②緩急や強弱、静と動などの動きを組み合わせて変化やメリハリを付けて表現することができる。
		③仲間と関わり合いながら密集や分散を繰り返し、ダイナミックに空間が変化する動きで表現することができる。
		④テーマにふさわしい変化と起伏、構成で「はじめーなかーおわり」で表現して踊ることができる。
	思考・判断表現	①提示された事例を参考に、自分の興味や関心に合ったテーマや踊りを設定している。
		②提示された踊りのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間やグループの課題や出来映えを伝えている。
		③提供されたテーマや表現の仕方から、自己やグループの課題に応じた練習方法を選んでいる。
	主体的に学習に取り組む態度	①創作ダンスの学習に積極的に取り組もうとしている。
		②仲間の手助けをしたり助言したりして、仲間の学習を援助しようとしている。
		③作品創作についての話合いに参加しようとしている。
		④一人一人の違いに応じた表現や交流の仕方などを認めようとしている。

２年男子単元計画

単元目標	知識及び技能	技ができる楽しさや喜びを味わい、器械運動の特性や成り立ち、技の名称や行い方、その運動に関連して高まる体力などを理解するとともに、技をよりよく行うことができるようにする。 跳び箱運動では、切り返し系や回転系の基本的な技を滑らかに行うこと、条件を変えた技や発展技を行うことができるようにする。
	思考力、判断力、表現力等	跳び箱運動の技などの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己の考えたことを他者に伝えることができるようにする。
	学びに向かう力、人間性等	跳び箱運動に積極的に取り組むとともに、よい演技を認めようとすること、仲間の学習を援助しようとすること、一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとすることなどや、健康・安全に気を配ることができるようにする。

学習の流れ（学習過程）	時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	授業づくりのポイント
	0	健康観察・準備運動・前時の振り返り・本時の目標										・感覚づくりとして馬跳びなどを毎回行う。 ・発表会に向けて、自分が挑戦したい技を設定し、そこに向けてペア学習を行う。 ・互いの挑戦や失敗を共有しながら、挑戦することや失敗することを前向きに捉えていけるような雰囲気作りをする。
	10	オリエンテーション	基本動作の確認（馬跳び、かえるの足たたき、ゆりかご）									
	20	小学校の学習状況の確認 基本動作の練習	基本的な技の練習（切り返し系）	基本的な技の練習（回転系）	踏み切り・突き放し・着地練習	課題発見	課題共有	課題共有	課題共有	発表会に向けての練習	発表会	
	30					課題解決①	課題解決②	課題解決③	課題解決④			
	40											
	50	健康観察・本時の振り返り										

指導と評価の機会		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	評価方法
	知	①	②	②								観察・ワークシート
	技		①	②	① ②						① ②	観察
	思					①	②	③	③	③		観察・ワークシート
	態	①	②			③						観察・ワークシート

単元の評価規準（学習活動に即した評価規準）		
	知識	①器械運動には多くの「技」があり、これらの技に挑戦し、その技ができる楽しさや喜びを味わうことができることについて、言ったり書き出したりしている。
		②技の名称は、運動の基本形態を示す名称と、運動の経過における課題を示す名称によって名づけられていることについて、言ったり書き出したりしている。
	技能	①踏み切りから上体を前方に振り込みながら着手する動き方、突き放しによって直立体勢に戻して着地するための動き方で、基本的な技の一連の動きを滑らかにして跳び越すことができる。（切り返し跳びグループ）
		②着手後も前方に回転するための勢いを生み出す踏み切りの動き方、突き放しによって空中に飛び出して着地するための動き方で、基本的な技の一連の動きを滑らかにして跳び越すことができる。（回転跳びグループ）
	思考・判断・表現	①提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えている。
		②提供された練習方法から、自己の課題に応じて、技の習得に適した練習方法を選んでいる。
		③仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた活動の仕方を見付けている。
	主体的に学習に取り組む態度	①跳び箱運動の学習に積極的に取り組もうとしている。
		②よい技や演技に称賛の声をかけるなど、仲間の努力を認めようとしている。
		③練習の補助をしたり仲間に助言したりして、仲間の学習を援助しようとしている。